

♪ 2019年度 *poco a poco* ♪

Nr. 2 2019年4月18日(木) 文責:プファイル・辰巳

### 復活祭を目前に・・・

「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」が復活祭と定められているため、毎年日にちが移動するドイツの祝日、オーステルン（イースター＝復活祭）。早ければ3月の末、遅ければ4月の20日過ぎ・・・という開きがあり、今年は随分遅い時期の復活祭ですね。生命誕生や多産を象徴するウサギやひよこ、たまご



などの飾りも復活祭が終われば片づけられ、次に店頭を賑わすのは、戸外で過ごすためのバーベキューセットやガルテンメーベル（お庭で使う家具）でしょうか？ 何はともあれ、日が長くなり、空の色が澄み渡り、木々の緑も日々鮮やかになっていくこの季節、やはりうれしいですね。新しいお友だちや先生と一緒に、元気いっぱい身体を動かしたり、歌ったりしましょうね！

一昨年度から連載を続けている「作曲家のこの一曲」。  
第22回までできました。次のテーマで連載を始めるまで、あと1・2回だけお付き合いください。

### <作曲家のこの一曲 ② モーリス・ラヴェル

「マメールロワ」>

言葉も音楽もドイツのそれとは一味も二味も異なり、洗練された美しさのようなものを感じさせるフランス語・音楽。フランス語が全くできないので、フランス歌曲もあまり歌った経験がなく、嗜好もドイツ音楽に偏りがちな筆者ですが、フランスの作曲家ラヴェルの音楽には惹かれるものがあります。「ボレロ」や「亡き王女のパヴァーヌ」などを作曲した人、といえば、頷いていただけるでしょうか？

モーリス・ラヴェルは1875年、スペインとの国境に近いフランス南西部バスク地方に生まれました。息子の音楽に対する熱意と才能を信じた両親にも励ま

され、パリ音楽院で作曲家になる勉強を始めたモーリス少年。師事した先生は、ガブリエル・フォーレでした。

ラヴェルは周囲の人々から「オーケストレーションの天才」「管弦楽の魔術師」などと呼ばれるほどの力量で、精緻な作曲法は「スイスの時計職人のようだ」と評する人もいたそうです。その力量を発揮して、自分の作品だけではなく、他の作曲家の器楽曲もオーケストラ版に編曲して成功を収めています。その代表作はムソルグスキーの「展覧会の絵」です。ムソルグスキーのピアノ版も素晴らしいですが、ラヴェルの編曲によるオーケストラ版も大変人気があります。

さて、そのラヴェルの代表作といえば、先に挙げた2曲のほかにも、「水の戯れ」「スペイン狂詩曲」「ダフニスとクロエ」「クープランの墓」など有名な曲がたくさんあるのですが、本日取り上げますのは「マメールロワ」という曲です。意味は「マザーグース」。題名通りマザーグースを題材にしたピアノ四手連弾による組曲です。



「眠れる森の美女のパヴァーヌ」「親指小僧」「パゴダの女王レドロネット」「美女と野獣の対話」そして「妖精の園」の5曲からなります。後にオーケストラ版に編曲されたものもありますが、私はピアノ連弾で聞くのが好きです。

生涯独身を通し、第1次世界大戦中に母を亡くして以来、精神的な病に苦しんだラヴェルでしたが、子ども好きではあったらしく、友人の子どものたちのために、この曲を作曲したそうです。

YOUTUBEには、ランランとアルゲリッチの連弾による「マメールロワ」があります。終曲「妖精の園」は眠れる森の美女が目覚めるシーンなのですが、最後に連発されるグリッサンドには圧倒されるものがありました。

### ほんのちょっとだけ 演奏会情報

5月5日(日) アルテオーバー・大ホールにて  
17時から ディアンネ・レーヴェス&バンド  
「ジャズの女王」

5月19日(日) アルテオーバー・モーツァルトホールにて  
16時から ファミリーコンサート  
「ブラームスのハンガリー舞曲」